

# ボーダー

移民と難民

目次

プロローグ 6

I 泣き虫弁護士、入管と闘う 13

私たちを助けてくれるの？ 14

断末魔 46

囚われの異邦人 59

馬でもロバでも 69

アフガニスタンから来た青年 84

国会前の攻防 100

II 彼らは日本を目指した 127

サバイバル・ジャパニーズ 128

### Ⅲ 難民たちのサンクチュアリ

看取りの韓国人	145
フィリピンの卵	158
ハノイの夜	171
赤い花咲く頃	193
クリスマス島の仮放免者	204
リヴィイのカレー	225
人の中へ	245
エピローグ	254
あとがき	260

カバー写真 佐々涼子  
ブックデザイン 鈴木デザイン室

子どもたちへ

## プロローグ

二〇二一年一二月。私は難民センターの長い廊下を、スーツケースを引きながら歩いている。廊下沿いには一二の個室が並んでいて、開け放たれたドアからは低い冬の陽が差し込み、壁にかかる木製の十字架に淡い影を作っていた。

これから私は、ここで生活している人たちと寝食を共にする。期間は一カ月。その分の費用は支払い済みである。

「身ひとつで来てもいいですよ。センターにあるものでよければ服も使ってください」と言われたが、取材で来ているのにそこまで世話になるのも気が引ける。とりあえずの着替え、シャンプー、歯ブラシ、ドライヤーなどをスーツケースに詰めてきた。

建物の正式名称はイエズス会日本殉教者修道院。鎌倉の丘の上にあるこの施設は、もともとイエズス会の修道士たちが日本語を学ぶ場として建てられた。役割を終えると、今度は信徒たちが黙想する場として使われ、長年「黙想の家」として親しまれてきた。

しかし管理していた神父たちの高齢化によっていったん閉鎖される。それを無償で借り受け

る形で開所したのが「アルペンなんみんセンター」だ。二〇二〇年四月のことだった。

来歴のせいだろうか。修道士や神父たちが去った後も、祈りの場独特の、清められたかのような静謐せいひつな空気が流れていた。今もなお、ここを歩いていた聖職者たちの気配がする。

私の前を小股で歩く小柄な女性、シスター津田は振り返って、私に話しかける。

「三階と一階どちらのお部屋がいいかしら？ 見てから決めましょうね」

彼女は南側に面した、三階の一室に私を招き入れた。

広い個室には簡素なベッドと重厚な木の机、洗面台があった。窓は施設の中庭に面していて、国立公園のようにきれいに整えられた広い庭が見える。ヒマラヤスギやサクラ、カエデなどが植えられており、地面を覆う落葉樹の葉が、夕陽と同じ色あいで庭を彩っていた。木々の上には青空が広がっている。

窓辺は穏やかな光で満ちていた。

「夜は、本当に降ってくるような星が見えるのよ」とシスターは言う。私はしばらく窓の外を眺めて、「この部屋がいいです」と答えた。

「そうよね。ここからの景色は素晴らしいのよ」と、シスターは小鳥が歌うような声で言った。

取材を始めるほんの二年前まで、難民と聞けば、真っ先に思い浮かべるのは海外の難民キャ

ンブだった。恥ずかしいことに日本に難民がいることなどきちんと考えたこともなかった。

だが無理もない。日本の難民認定率は極めて低い。二〇二一年、日本で難民と認められたのはわずか七四人。難民認定率は〇・七パーセントだ。一方ドイツは三万八九一八人で認定率二五・九パーセント、カナダが三万三八〇一人同六二・一パーセント、フランス三万二五七一人同二七・五パーセント、アメリカ二万五九〇人同三二・二パーセントなどで、欧米と比べて日本の低さは際立っている。

では、日本で難民として認められない人たちはどこへ行くのだろう。日本には、非正規滞在者を収容する出入国在留管理庁の施設、通称「入管」がある。ビザがもらえない場合、その人たちはしばしばそこに囚われるのだ。

その後、ビザを与えられないまま入管から出されることを「仮放免」というが、たとえ仮放免で出てきたとしても、自由の身とはとても言えない。

なにしろ働くことが許されず、社会保障もない。誰かの支援に頼らざるを得ず、本当に困った時も行政に手を貸してもらうこともできない。これでどうやって生きていけというのだろう。特に彼らが必要としているのは住居だ。たとえ友人や支援者の下に住まわせてもらおうとしても、いつまでも置いてもらうのは難しいだろう。

そんな折、仮放免の人たちが身を寄せる場所が鎌倉にできたと知り、ぜひ取材を試みたい

と掛けあったのだ。

シスター津田に一階も案内してもらおう。

突き当たりには、簡素だが大きな礼拝堂があり、マリア像がある。

ある部屋の前に来ると、シスターが立ち止まった。

「中を見せてくれるかもしれないわよ」と彼女はドアをノックする。

「ちょっといいかしら。お客様なの。中を見せてもらっていい？」

すると、部屋の奥からは、まだ日本に来たばかりなのか、片言の「ハイ、ダイジョウブ」の  
声。

ドアを開けると、大柄の若い黒人女性がひざまずいていた。彼女の前にはベビーバスが置かれ、湯の中に女の赤ん坊を入れて沐浴もくよくさせている。赤ん坊はふつくらと太って、まつ毛が長く、零れ落ちそうなくらい大きな瞳でこちらを見つめていた。南側の窓から薄日が差し、逆光で湯気が照らされている。

思いがけない光景に胸を突かれる。

話には聞いていた。この子がここ、アルペンなんみんセンターで生まれた女の子だ。

母親は湯舟から子どもを出すと、バスタオルで身体を拭き始めた。湯気の立つ身体はやわら

かそうで、髪が濡れた姿はまるでキューピー人形だ。

「抱かせて」と私が頼むと、女性は「イイデスヨ。アナタ抱ク？」と笑って、子どもを裸のまま私に寄越した。

ずっしりと赤ん坊の重さが私の腕に来る。そこから体温が伝わってきた。泣かれるのではないかとおそろおそろ抱く私とは対照的に、その子は警戒することもなく見知らぬ私の腕の中に身体を委ねていた。しっとりとした赤ん坊の感触を感じながら、私は、取材で見してきた何人もの難民申請者の表情を思い出した。

思わず言葉が口をついて出る。

「ああ、よく生まれてきたね」

あとは言葉にならない。

人はどこに生まれてくるかを選べない。だが、恣意的に人間の引いた国境線など、この小さな命に何の意味があるというのだろうか。私たちは、みな裸のまま生まれてくる。それをこちら側と、あちら側で区別するものは、人間が頭の中で作った境界ボーダーにすぎない。

赤ん坊の黒い瞳にこの世界は、いったいどう映っているのだろうか。赤ん坊が手を伸ばして私の顔は無邪気に触る。

母親は私の顔を覗のぞき込んで、驚いた顔をした。

「ナンデ泣クノ？ ナンデアナタ泣イテイル？」

私は恥ずかしくなって慌てて袖で涙をぬぐった。だがそれは悲しみではない。喜びの涙だ。女性が赤ん坊越しに私を優しくハグしてくれた。

いつの間にか母親も泣いている。

シスターまで目を赤くして、涙を拭きながらこう言った。

「あらやだ、おかしいわね。大人はみんな泣いているのに」

見ると、この部屋でただひとり赤ん坊だけが、腕の中で笑っていた。

※本作では難民の生命の危険性に配慮し、フルネームで名前を記載している人以外は、原則として仮名にしています。

# I 泣き虫弁護士、 入管と闘う

## 私たちを助けてくれるの？

### 1

一九九五年七月。前年に司法修習を終えたばかりの新米弁護士が地下鉄の改札を抜けて暗い階段を上がっていくと、出口に空が見えた。

夕方になり日は傾いてきたとはいえ、まだ暑い。スーツにネクタイ姿で、医者が往診に使うような大きなカバンの重さを肩に感じながら階段を上がると蟬せみの声が大きくなった。

これが若き日の児玉晃一こだまこういち（二八）だ。

児玉晃一は温厚、誠実を絵に描いたような人物だ。シャイで物静かだが、右に出る者のいない酒豪で、いったん酒を飲ませると陽気でおしゃべりな人に変身する。弁護士仲間のネットワークを作る能力は、まず間違いない酒場で培われたものだ。酒のために仕事をしているのではないかと思うほど仲間と飲むのが好きなのだ。

彼はバリトンの穏やかな声をしている。かつて旅先で出会ったバングラデシユの僧侶が、いい僧侶の条件は声の良さだと言っていたことがあるが、人の心を揺り動かすのに声の力は大きい。声高に主張するような押し強さはなく、法廷で話す時でさえ、深夜のラジオから聞こえてきそうな、思わず耳を傾けたくなる声だ。その声からも人柄は滲み出る。

彼は涙もろい。法廷では時に被告人を思つて、あるいは出会った何人もの難民申請者を思つて泣く。

後輩弁護士の本多貞雅ほんださだまさに「印象的なエピソードはありますか？」と聞くと、茶目つ氣たつぷりに「うーん、よく泣いているんで、どれがどれだったのかよく覚えていないですね」と言う。「特に子どもの話はダメですね。ああ、児玉先生泣いちゃうな、泣くんだろうな、と思うじゃないですか。で、ちらつと見るとやっぱり泣いている」と笑う。

児玉は「泣き虫先生」だ。

これから記すのは、彼の人生を変えた日のできごとだ。

児玉が地上に出ると、自転車を引いたひとりの少女が立っていた。じつと児玉を見つめている。

Tシャツにスカート。長い髪を結わえ、手足のすらつとした女の子だった。目の輝きが強い。

あたりを見回すが大人はいない。彫りの深い顔立ちをしたこの子は、たぶんイラン人一家の娘だ。大人がいるとばかり思い込み、小学生の女の子が迎えにくるとは思っていなかったのも、彼は少々面食らった。少女は無言で児玉を見ている。

児玉は、性格そのままの穏やかな声で、少女に話しかけた。

「弁護士の子は、迎えに来てくれたの？」

うなずくと、彼女は「ナディア」と名乗った。小学六年生、一二歳だ。

「ついてきて」とぶつきらばうに言うのと、にこりともせず自転車を押して前を歩き始める。

日本語の発音は完璧だった。

どこまでも平らかな街に、民家がたくさん立ち並んでいる。

数日前、児玉は友人の関聡介せきそうすけ弁護士から頼みごとをされていた。

「イランから来た一家の相談を受けたんですが、どうしても今、手が離せなくて。児玉さん、申し訳ないのですが、話だけでも聞いてくれる？」

彼は気軽に「いいですよ」と請け合った。

電話をかけてきたイラン人の母親は、まだ日本語がよくわからないようで、うまく意思の疎通ができなかった。口頭で道順を教えても、事務所までたどり着けそうもない。そこで児玉が家まで行くことにしたのだ。てっきり母親が迎えに来ているかと思ったのだが、親の代わりに

娘が来たらしい。

道案内をする少女の薄い背中についていきながら、児玉は手持ち無沙汰だった。この年頃の子とどんな会話をしたらいいのか、さっぱりわからない。

女の子は沈黙を気にする風でもなく無言で自転車を押している。児玉も黙って後ろをついていった。途中大きな団地を抜け、またさらに住宅街の中を進んでいく。二〇分は歩いただろうか。

〈結構遠いな〉と彼は思った。

道が狭くなった。もうすぐアパートに着くのだろう、というタイミングで、ナディアは自転車を塀にたてかけて振り返ると、児玉の瞳をまっすぐ見てこう言った。

「私たちを助けてくれるの？」

そのひと言を胸に秘めたまま、彼女は歩いてきたのだろう。

彼はたじろいだが、正直にこう答えるしかなかった。

「まだ、わからない。話を聞いてみないと何とも」

人は時おり運命の出会いをする。それは彼が運命を選んだというより、運命が彼を選んだ瞬間だった。児玉に放たれた少女のこのひと言が、彼のそれからの日々を変えてしまった。

児玉は都立小石川高校から早稲田大学法学部に進学した。小さい頃から勉強はよくできた。彼の父母、祖父、そして伯父伯母と一家は親戚も含めてみな床屋だ。父も伯父も技術コンクールで賞を取るほどの腕前だった。

児玉は小さい頃は本をよく読み、特に探偵ものが好きだった。探偵に憧れたが途中から法曹を志すようになり法学部に進学した。

司法試験に合格した時、中卒で床屋になった父親は、「俺の息子が司法試験に受かった」と喜んでいたという。母親は山形県出身。中学を卒業すると床屋の専門学校に通った。卒業し東京の床屋に就職すると数カ月でその店の長男との結婚が決まった。「私の意思なんて関係なかったよね」と母親は言う。結婚式の招待客も児玉の祖父の父親の関係者ばかりだった。その後、祖父の思いつきで食堂を経営することになり、彼女は床屋と食堂の両方を切り盛りすることになる。児玉が国境を越える人たちについて語る時、よく山形県出身の母親のことを口にする。

江戸時代は通行手形なく関所を越えるのは罪だった。だが、今は誰もが自由に往来している。東北から東京に出てきた母親が跨いだ県境のように、国境もまた時代によってうつろう線引きにすぎない、と言う。

児玉は当初、判決でこの社会をより良いものにしたいと希望に燃えて、裁判官を志望した。だが、裁判官が良心のみによって判決を下すことができるというのは建前で、その実情はサラ

リーマンと同じ、あるいはもつと露骨な縦社会だった。

児玉は司法修習生時代にある場面に遭遇した。

裁判では、ベテランを裁判長にして、勤続五年以上の右陪席、新米の左陪席と司法修習期順で役職がだいたい決まっている。エレベーターに乗る時には、左陪席がボタンを押し、ドアを押さえて、裁判長と右陪席が奥へと入るといって「作法」があった。

一事が万事だった。裁判所も年功序列の縦組織だ。こんなところで裁判長に反対できるかと言われたらとてもできない、と児玉は思った。家族ができて子ども生まれれば、反骨精神を貫くのも難しい。次第に組織の色に染まっていくのは目に見えていた。

だから市民は国に勝てず、国が負けるような判決を下す裁判官は左遷される。

サラリーマンが嫌で司法試験を受けたのに、上下関係の厳しい裁判官になるという選択肢はないように思えた。

では検事はどうか。彼は指導教官に気に入られ、検事になることを強く勧められた。しかし、強引な取り調べに疑問を抱いた。率直に疑問を投げかけると、「検事はこれでいいんだ」と教官に言われた。

〈これでいいのか？〉

起訴されれば、ほぼ間違いなく有罪になる司法制度の中で冤罪えんざいが生まれるのは免れないだろ

う。結局、ここでも職務に忠実であろうとすればするほど組織の色に染まってしまふ。

消去法で児玉は弁護士になった。同期には明確な目標を持つて弁護士になる者もいた。しかし自分には何を救いたいとか、誰のために闘いたいとか、そういうものがない。彼は刑事事件の国選弁護を引き受けながら、自分の道を探していた。

児玉が最初に手がけた事件は否認刑事事件だった。被疑者はオウム真理教の信者だ。彼はまず、サリンを製造したとして殺人予備罪で逮捕され、さらに松本サリン事件で、殺人罪の共犯で再逮捕される。大勢の信者が逮捕された事件で弁護士が足りず、児玉は新米でいきなり重大事件に駆り出された。

男性は杉並署で朝の九時から夜中まで毎日取り調べられていた。通常なら警察が取り調べることが、重大事件だったため、すべて検事による取り調べだったという。

児玉は毎朝欠かさず接見をした。男はもともと電気配線工で、施設の換気扇の取りつけを手伝わされたのだという。それがサリン噴霧器として使われた。そこで彼は松本サリン事件の殺人罪の補助ほうじょの容疑で、取り調べを受けたのだ。

「自分は換気扇をつけただけです。まさかサリンをまくなんて知らなかった」

男は強く否定していた。教団の下っ端だ。〈本当に知らなかったのだろう〉と児玉は思った。

だが、たった一日、児玉が面会に行かなかった日曜日、依頼人は「ひよっとしたら何か悪いことに使うかもしれないと思った」という供述を取られ、「未必の故意」があったとして有罪になった。

児玉は忸怩たる思いだった。

坂の上に建てられた小さなアパートの外階段を、少女は上っていく。一見しゃれた外観だが、工事費用の削減のためか、ひどく華奢きゃしゃに造られた狭い階段を児玉も続くと、立ち並んだ家々の屋根が眼下に見えた。

ドアを開けて入ると、少女の母親が出迎えてくれた。少女とよく似た、芯の強そうな女性だった。長い髪を娘と同じように結わえて、赤いワンピースを着ている。中に入ると、狭い室内にペルシアじゅうたんが敷いてあるわけでもなく、子どものいる日本人家庭とさほど変わらぬ部屋だった。

イランで母親は高校の校長、父親も専門学校の教頭で美術教師だった。日本に難民として逃れてくる人はたいいてい航空機を使う。比較的裕福で高等教育を受けた人が多いのだ。彼らもエリートで、母親の勤務していた学校は、将来、官僚になるような生徒たちが通う学校だった。

母親は日本語がうまくできないので、ナディアが通訳をして話が始まる。

イランでは、一九七八年に始まったイラン・イスラム革命以来、反米政権が国を支配し、強権を振るっていた。親米政権を通じて原油の利権を得ようとするアメリカやイギリスに怒った国民が立ち上がり、革命を起こしたのがこの政権の始まりだ。

その後テヘランで起きた在イラン・アメリカ大使館人質事件を機に、アメリカとイランは国交を断絶していた。政権を支えている民族主義者はアメリカを悪魔と呼び、少しでもアメリカ寄りの発言をした者は投獄され拷問されることもあった。

それは革命記念日のことだ。小学校の朝礼で、教師たちがアメリカの国旗を燃やして、「ホメイニ万歳、アメリカに死を」と叫び始めた。そして子どもたちにもそれを復唱しろと言う。それを見ていたナディアは、彼らの面前でこう言った。

「そんなことをするために、高い学費を払って学校に来ているわけじゃありません」

この一件が大騒動となった。母親は学校の教師らにこんな言葉を投げつけられるようになる。「この子は反政府思想の持ち主だ」

「両親も反政府主義者に違いない。両親は教育者だ。学校に通う子どもたちも汚染されてしま

う」  
やがて夫婦は命を狙われるようになる。

危険を感じた一家は、父親、母親、娘、息子で、国を脱出してきたというのだ。

目の前で、淡々と通訳するナディアを見ながら、イランのことをよく知らない児玉は、正直なところこう思った。

〈ほんとかよ〉

まるでスパイ映画か何かのようではないか。命を狙われる、消されるなどと言われても、ピンとこなかった。そんなことで命を狙われたりするだろうか。帰りたくないばかりに作り話をしているのではないか。

目の前に座っている少女を見る。話を総合すると、つまり彼女が一家を困難に陥れたということになる。

〈そんなことを子どもに訳させていいのか〉とも思った。だが、ナディアの口ぶりには、本当のことを言っただけ、という感じで罪悪感はないようだ。

一家は観光ビザで日本にやってきた。当時は同じように観光ビザで入国した同胞がたくさんいた。日本は空前のバブル景気で建設現場などに人が足りず、いくらでも仕事があったのだ。

警官に職務質問をされることもあったが、彼らがオーバーステイであることを知っても見逃していた。非正規滞在の外国人は、事実上日本の労働力の供給源だったのだ。

国は建前では単純労働者を受け入れないと謳<sup>うた</sup>っていたが、観光ビザで入ってきた非正規滞在者が働くのを黙認していた。ところがこの蜜月関係はバブルが弾<sup>はじ</sup>けて終わりを迎える。

ある日、父親と息子が歩いていると、警察に捕まった。いったんは解放されたが、父親は入管に収容されてしまったのだ。

「命を狙われた。それで日本に来たんです」。父親は説明したが、しばらくすると一家全員に退去強制令書が出た。そして残りの家族も入管の施設に収容された。

ナディアは六年生、弟のアブドゥルは三年生で、近所の小学校に通っていた。

そして児玉は、イラン人の母親から日本の入管の実態を聞かされる。耳を疑うことばかりだった。

家族四人は、東京都北区の旧第二庁舎、通称「十条の入管」に二週間ほど収容された。父親は男性房、母親と子ども二人は女性房だ。

その様子を母親は苦しげに語る。

「中はとても暑くて、運動場もありません。子どもたちも身体を動かすところなんてどこにもないんです。窓はあるけど開けることもできず、曇りガラスで外も見られない。

シャワーは週に二回だけ。それも一五分と時間が決まっていて、ゆっくり身体を洗うことも

できません。

耐えがたかったのはトイレです。部屋の片隅にあつて壁がないんですよ。しゃがめば腰のあたりまでは隠れるけど、臭いは漏れるし音は周りに筒抜けです。大人だって我慢できないのに娘も息子もそこで用を足さなきゃならない。

特につらかったのは息子のことです。雑居房にぎゅうぎゅう詰めで収容されていましたが、一緒だったのはタイとコロンビアの売春をしていた人たちでした。退屈しのぎに男性の性器のことを大声で話して笑っていました。

それだけではありません。息子は性的なことだからかわれたり、パンツを脱がされていじめられたり。もう精神的にも限界でした。

私はイスラム教徒です。こんなところにこれ以上子どもを入れておくのは耐えられない。国に戻れば殺されるでしょう。でも、殺されてもいいからイランに帰る。ここよりはましです。

思いつめた挙句、職員にそう言つて出してもらいました。一学期が終わるまで日本にいて、引越しの挨拶だけしてイランに帰る。だから出してくだささいと」

彼らは父親だけ残して仮放免された。

児玉は、母親の言っていることがにわかには信じられなかった。

時は九〇年代半ば、日本は驚異の経済発展を遂げており、街は美しく、世界に胸を張る人権

国家として歩き始めていた。だが、その裏で何の罪もない子どもたちを、勉強も運動もさせずに閉じ込めておくなど本当にあるのだろうか。

「もうすぐ一学期が終わります。学校が夏休みに入る頃にまた出頭しなければなりません。でも帰ったら殺されるかもしれない。どうしたらいいでしょう。私たちを助けていただけませんか？」

通訳をしながら、ナディアは児玉をじっと見つめた。

児玉は少なからず衝撃を受けた。入管についてのそんな話は聞いたことがなかったし、報道を見たこともない。

ただ、思い出してみると児玉にはひとつだけ心当たりがあった。司法修習生だった時の友人が教官の弁護士とともに入管に行くと、応対した職員がこう言ったという。

「先生、こちらのトイレをお使いください。あいつらと同じトイレを使うのは嫌でしょう？」  
強烈な違和感があった。そんな差別発言をする公務員がいるのだろうか。

事務所に戻ると、児玉は方々に連絡してイランの実態について調べてみることにした。すると、国連、アメリカ国務省、イギリス内務省などが毎年、各国の人権レポートを作っており、取り寄せてみると、一家と同じようなケースが報告されていた。イランでは市民が秘密警察の

ような組織に暗殺されたり、交通事故に見せかけて殺されたりしている。エリート校の校長と専門学校の教頭である夫婦だ。みせしめに殺されることは十分にありうる。

そこで児玉は、改めて母親の証言を聞き取ることにした。彼女はうまく言葉が出ないこともあったが、それでもひと言ひと言通訳を介して丹念に彼らに話を聞いた。すると、想像をはるかに超えた過酷な状況が次第に明らかになってきた。母親はこんなことを語った。

「ご存じの通り、イランでは反政府の言動に対して激しい弾圧を加え、時には殺されてしまうことが数多く見られます。前政権の軍隊で働いていた義父も銃殺刑になりました。義父は、新政権に反対して批判的な言動をしていたという理由で三カ月投獄された後、そのまま殺されてしまったのです。義父は当時八〇歳を超えていましたが、そのような老人であろうと、あるいは子どもであろうと、イランではまったく関係なく銃殺されてしまうのです。戻ってきた遺体には数カ所、銃弾の貫通した痕がありました。

義父の死後、夫の家族は危険を避けて転居するとともに、姓も変えて迫害から逃れようとしてきましたが、反政府的言動に対する激しい弾圧は続きました。親戚の十代の娘は、突然行方不明になってしまいました。一カ月ほど家族総出で探していたところ、娘は反政府的言動の罪で投獄されていることがわかりました。聞けば、校長先生の話にちよつと笑つたらしいのです。その子は四年間も牢獄で過ごしました。その子だけではありません。親戚で投獄された者がほ

かに何人もいます。

私たちはなるべく目立たないように暮らしていました。しかし正義感の強いナディアは小学校での行いに『やめなさい。みんな同じ人間でしよう?』と口にしてしまったのです。

親族からは『このままだと呼び出されて連行され、誰にも知られず殺されてしまうだろう。一刻も早く逃亡したほうがいい』と言われて、イランを脱出してきました。

ビザが下りたのは日本だけでした。イランでは、国外に行くときには必ず政府の許可が必要ですが、それも違反して出国しました。私たちはどこにも帰れない。今、イランに戻れば命の保証はありません」

さらに児玉が驚いたのは、弁護士や市民団体が報告する日本の入管の実態だった。

入管では劣悪な環境の下、日常的に暴行が行われており、電話を取り次ぐにも「胸を揉ませろ」と迫るなど、職員による強制わいせつや強姦<sup>ごうかん</sup>までが報告されていた。

あまりの凄惨な状況に児玉は思わず泣いた。ナディアの母親の言っていることは本当だった。「話を聞きにいくだけ」。そう頼まれたはずだったが、もはや手を引くことができなかった。彼らが頼れるのは自分たちだけなのだ。

「難民申請をしましたか?」

迫害を受けて国を逃れてきたのであれば、彼らは難民に該当するはずだ。しかし当時、少ない数の反体制派のイラン人が日本に逃れてきており、難民申請をしなくても日本に滞在することができていた。だからわざわざ難民申請をする必要はなかったのだ。難民申請はやむを得ない事情がない限り、入国から六〇日以内に申請しなければならなかった。とうに期限を過ぎていた。一家には退去強制令書が出ていた。

「難民認定を求めて、裁判を起こしましょう」

児玉らは裁判の準備に奔走した。

一学期が終わり、子どもたちに夏休みがやってきた。

過度のストレスで母親は咳せきの発作が止まらなくなり、高熱が出て、二度の出頭要請にもとうとう応じることができなかった。弟のアブドゥルは夜になると入管のことを思い出して「牢屋が怖い」と言って泣き、精神状態が不安定になっている。追い打ちをかけるように入管側から、「いゝ加減にしろ。今度拒否したら捕まえに行く」と脅しの電話が入ったのである。

再び何の罪もない子どもたちを入管に閉じ込めるのは我慢できなかった。なんとか入管の呼び出しに応じないで済む方法はないだろうか。

「だが……」。児玉は関と、こんな話をした。

「もし三度目の出頭も拒否して『仮放免を延ばしてください』と言ったら、入管は必ず捕まえにきて、そのまま強制送還に追い込まれるでしょう。でも出頭要請に応じれば、少なくとも要請に応じたという実績が残り、次の展望も開ける。やはりここは出頭するしかないんじゃないでしょうか。ちゃんとお母さんにそういう話をして、出頭してもらうことにしましょう」

しかし、たとえ出頭要請に応じて收容されたとしても、入管の動きが早ければ、裁判の前にイランに送り返してしまうかもしれない。

子どもたちの命がかかっている。弁護士になったばかりの児玉は、責任の重さを実感した。

出頭日当日。児玉と関は家まで家族を迎えにいった。暑い一日だった。

旅行カバンに着替えを詰め込んだ一家が家から出てくる。しかし彼らには交通費もない。三〇分ほどの道のりを、ゆっくり歩いていくことにした。誰も急ぐ者はいない。入管に行っても、家族には收容が待っているだけだ。

児玉は自責の念に駆られた。

〈これってつまり、一家が逃げないように僕らが見張りをしているようなものじゃないか〉

川沿いの道は桜の青葉が茂り、絶好の散歩ルートだった。だが、收容される日だと知っている大人の足取りは重かった。

それに比べて子どもたちはタフだ。少女はすたすたと歩き、少年はなぜかいつも以上に饒舌じょうぜつで明るい。川を覗き込んだり、塀に登ったりしてはしゃぎながら道中を行く。

児玉は、彼らの後ろ姿を見ながら考えていた。

「僕らは何をやっているんだろう。今まで刑事弁護で捕まっている人を外に出すことを使命としてきた。ところが今日は、何の罪もない子どもたちを入管に捕まえさせに行く。確かに納得してもらっているし、逃げたところで先はないのはわかっている。でも、悔しいじゃないか」

十条の入管の赤レンガでできた入り口をくぐる。仮放免の延長は認められず、その場で収容が決まった。

職員はナディアのリュックについていたバッジを外すように指示した。針がついているものは持ち込めないのだという。それは彼女が好きだった日本のアイドルグループのバッジだった。ナディアは外すと、それを児玉の手のひらに載せた。

「はい、先生。これ預かってて。出てくるまでなくさないで」

児玉は、この女の子の強さに勇気づけられた。

「この子、出てくる気だ」

ナディアはイランに送り返されずに解放されると信じているのだ。

対照的にアブドゥルの顔は恐怖でひきつっている。

児玉は、思わず目を赤くして、職員に連れていかれる親子の後ろ姿に呼びかけた。

「頑張るから。絶対出してやるから。頑張れよ」

ナディアは振り返って笑顔を見せた。

児玉は、理不尽と闘うには法しかないと腹をくくった。

この日は金曜日。裁判を起こせば強制送還の停止効が働く。入管が彼らを強制送還してしまう前に何としてでも国を相手取って訴訟を起こさなければならぬ。入管とのスピード勝負だった。

収容されると同時に面会し、児玉はその場で仮放免の委任状を取った。関は事務所で仮放免の申立書を書いた。

この時代、書類のやりとりはファクスだった。入管のすぐそばにはチケットショップがある。そこでは強制送還を言い渡された外国人が帰国するための航空券を売っており、関の知り合いのイラン人女性が働いていた。

児玉が事情を話すと、「大変な子たちがいるのね」と心配し、快くファクスを使わせてくれた。

関が書いた仮放免申立書を児玉がファクスで受け取る。それを入管に提出した。さらに児玉らは訴状の準備を始めた。

〈子どもを收容する理由などあるわけがない〉と児玉は思った。

土日も二人で事務所に籠もり、膨大な量の作業をした。書類を作り、大量のコピーをして、それをホチキスで留めていく。

訴状を見た裁判所が国に求めた返答の期限は一週間後。このような事例ではたいてい返答の期限は一月。裁判所が通常より早く期限を区切るのはこの問題を重く見ている証拠だろう。児玉は確信した。きっと子どもたちは出てくる。

一週間後の金曜日、児玉が面会に行くと、思いがけず早く母親とナディア、アブドゥルの三人が仮放免で出てきた。三人は笑顔だった。

国は子どもを收容する正当な理由を示せなかったのだ。

児玉は国がどう反論してくるかと思っていたが、仮放免で出すから問題はないと書面にあった。児玉と関はあきれて笑った。国は反論できず慌てて彼らを外に出したのだ。

だが一家の父親は、まるで人質のように收容され続けた。收容期間が長引くにつれて父親の

心が壊れていくのが手に取るようにわかった。

児玉はある光景が忘れられない。

母親とともに面会に行った時のことだ。その別れ際、アクリル板の下のわずかな隙間から、少しだけ差し伸べられた父親の指先に、母親は泣きながら唇を寄せた。

裁判の係争中、父親のいない三人のためにと、関はデイズニールランドに、児玉はボウリング場に連れていった。児玉は彼らと食事をし、その日は母親も楽しそうに笑っていた。

やがてナディアは日本で中学生になって、ボーイフレンドもできた。だが、手をつないでいるところを母親にとがめられ、親子喧嘩になってしまう。やはりイスラム教徒の母親にはどうしても許せない行為だったのだろう。母親はかっとなって、ついにこう言ってしまった。

「誰のためにこんなことになったと思っているの？ あなたのせいでみんながこんな目に遭ってるんじゃないの」

それを聞いたナディアは家を飛び出し、夜遅くまで帰ってこなかった。

結局、裁判には敗訴した。

難民認定はされなかったのだ。この結果だけ見ると、裁判で認められなかったのだから一家

は偽装難民だったと思う人がいるかもしれない。

しかし、国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）の見解は異なっている。

一家のもとにはイラン大使館から「早く訴訟をやめるように」と脅しの電話が入っていた。それを重く見た難民高等弁務官事務所は、彼らに危険が迫っていると独自の難民認定をして、ノルウェーを受け入れ先にして逃がしたのである。

児玉たちは一家の命を救ったのだ。だが、疑問は残る。なぜ難民高等弁務官事務所が難民認定するような人たちを、日本政府はビザも与えずに犯罪者のように収容施設に閉じ込めたのだろうか。

たまにかかってくるきていたナディアからの電話も途絶えた。

「こっちは寒いよ。日本に帰りたい」

そう言っていたナディアの声が今も児玉の耳に残っている。

「せっかく助けてやったのに何言ってるんだ。もう、戻ってくんない」

児玉は笑ってそう答えた。

父親は精神を病んでその後母親と離婚。行方知れずになった。

ナディアは向こうでモデルをしているのだと言っていた。

児玉は時おりスマートフォンを見つめて、ナディアが元気で暮らしていることを祈っている。

**ボーダー 移民と難民**  
**佐々涼子・著**

発行：集英社インターナショナル（発売：集英社）  
定価：1,980円（10%税込）  
発売日：2022年11月25日  
ISBN：978-4-7976-7402-6

ネット書店でのご予約・ご注文は [こちらにどうぞ！](#)